

# 愛媛県立 松山西高 同窓会報

# Way

平成12年7月20日発行  
発行所  
松山西高等学校同窓会  
松山市久万ノ台  
印刷所  
株式会社 松栄印刷所

## 新しい時代への高校教育



校長

### 渡辺 福徳

同窓会の皆様には、ますます  
すご清栄のことと存じます。  
皆様方には、日頃から母校  
の発展のために、各方面にわ  
たり格別のご理解とご支援を  
賜わり感謝をいたしておりま  
す。

現在、千三百六名の生徒が  
在籍しておりますが、全員  
元気で楽しい学校生活を送っ  
ております。

先ほど行われました県総合  
体育大会では、ダンス部が昨  
年に引き続きの連続優勝、  
水泳部が総合優勝をするなど

見事な成果が出ております。

また、今春の卒業生の進路  
状況を見ますと、難関校とい  
われるお茶の水女子大学、東  
京工業大学、九州大学、九州  
工業大学など、国公立大学の  
合格者数が百名を超えまし  
た。

私立大学でも、早稲田大学、  
慶応大学などに合格してお  
り、まさに文武両道の活躍を  
しております。

今日、学校教育も地方分権  
と規制緩和の流れを受け、学  
校選択の弾力化や特色ある学

## 卒業生数

10,957 名

平成12年4月1日現在

校づくり、学校の自己責任等  
の問題が大きくクローズアッ  
プされ、教育改革が急ピッチ  
で進められておりますが、教  
育に対する社会の期待は大変  
厳しく、多様なものとなって  
おります。

本県におきましても、ご承  
知のように学校管理規則の大  
幅な見直しが行われ、各学校  
の裁量権が拡大しました。ま  
た、昨年発足した高校教育検  
討委員会の中間報告を見まし  
ても学校教育が大きく変わろ  
うとしております。

これらの一連の教育改革を  
実りあるものにするためには、  
先ず我々教師がその趣旨やね  
らいを十分に理解し、前向き  
の姿勢で取り組むことが大切  
であると考えております。

今後とも、皆様方の変われ  
ぬご支援、ご鞭撻をお願い申  
し上げます。

## 松山西高校と同窓会



同窓会長

### 伊賀上 竜也

昭和四十九年に設立された  
母校「愛媛県立松山西高等  
学校」も早いもので、平成十五  
年には、創立三十周年の節目  
の年を迎えようとしています。  
新設校と言われながら既に

一万名を超える卒業生を送り  
出した母校もいまや中予地区  
における東西南北の進学校と  
して、すっかり定着し卒業生  
として大変嬉しく感じると同  
時に、学校創設準備から携  
わってこられ志し半ばにして  
お亡くなりになった麻生先  
生、高橋先生と一緒に三十周  
年を祝えない寂しさが交錯  
しております。

また、平素より同窓会に対  
しまして温かいご支援ご協力  
を賜わり本紙上をお借りして  
熱く御礼申し上げます。

さて、今回同窓会報の原稿  
を出して下さいという依頼を  
広報委員さんから受けて何を

書けばよいのか悩んだ末に三  
十周年に向けて私が苦慮して  
いる思いを素直に皆さんに  
解ってもらえればと願い正直  
に筆を執ってみましたと思いま  
す。

本来「同窓会」という団体  
の持つ本当の役割は何であろ  
うか。卒業生にとつての「同  
窓会」と在校生にとつての「同  
窓会」また、学校から見た「同  
窓会」これらのそれぞれの思  
いや考え方の相違から本来進  
むべき方向が少しずつ違っ  
てきているような気がしてなら  
ない。歴代の校長先生を中心  
とした先生方の努力と学校へ  
の思いや在校生が卒業までに

学校に対する思いや記憶の中  
で母校をどう受け止めるか。  
また、実際に卒業した同窓会  
会員の皆が、後輩や学校に対  
して持っている熱い思い等が  
空回りしている部分が見え隠

れてならない。個人の私見として、やはり同窓会という組織集団は学校を支えながら在校生の思いを感じ取り一人でも多くの学友が我々の中に慶んで入会してこられる運営を常に考えていかなければ成り立っていかないと三十周年という節目の年を目前に控え考えている毎日であります。まだまだ、若い同窓会が何を偉そうにと言われるかも知れませんが、年齢の老若ではなく母校を愛せて深い思い入れのある仲間を少しでも増やし続けなければ、同窓会などという組織は名前だけの飾り物で終わってしまうのではなからうか。今後、機会の有る度にも少し話し合いの出来る場面を増やし三位一体となったどこにでも誇れる「同窓会」を目指してとどまる事なく前進して行きたいと念願致しております。先生方各位や後輩在校生の協力がなくては先程述べた通り思い込みだけの組織です。

今後、更に素晴らしい学校を同窓会を育てていく一助に皆様のご協力をお願いし御挨拶とさせていただきます。

### 思い出すことども



旧職員

(昭和五十年四月 - 昭和五十七年三月)

### 日下哲夫

昭和五十一年四月、完成年度を迎えた西高に赴任を命じられ、高鳴る期待を胸に着任した。

始業式・入学式を二日後に控えた四月六日新年度最初の職員会議後、新任の国語科の同僚である月原孝・大塚千代吉先生と共に屋上にあがり、校内外の景観を目にしたとき、懐かしさで胸が一杯になった。というのも、久万ノ台は私の小学生時代の遠足の地であり、成願寺は四月八日の灌仏会に、釈迦像の頭に注いだ甘茶を水筒に入れてもらい、正に甘露甘露と喉を鳴らした所だったからである。

しかし、そんな甘い感傷に浸ったのもその日限りで、翌日からは、草莽の原野を師弟同行の精神で切り拓いてこられた先任の先生方に伍して、西高発展のために全力を傾け

ることとなった。その一端を部活動を中心に記したい。

西高放送部の本格的活動の先鞭をつけたのは、昭和五十一年六月、県高校放送コンテストラジオ番組制作部門第一位入賞であった。砂野部長を中心に、「西高バッグ」に込められた建学の精神を熱く語ったものであった。次いで翌年六月、同部門で、「WAYからの発想」が再び第一位となり、中須賀部長始め部員一同、先輩の偉業を継承できたことに欣喜雀躍したのであった。そして迎えた昭和五十四年六月、第十八回県高校放送コンテストにおいて、ラジオ番組課題部門、自由部門、朗読第一位、総合優勝の快挙を成し遂げ、その存在を不動のものにした。ちなみに部長は向井君であった。

### 額打ちつけこぼる涙の

夜深かむ

右の句は、「久万の台」二号に掲載されている、当時二年生であった高橋敏宏君のものである。私が担当していた俳句クラブでの作であるが、

### 西高の四季



旧職員

(平成四年四月 - 平成十一年三月)

### 白石正一

松山城の天守閣を中心に、西高までの距離を半径として円を描けば、その範囲内に西高を含めて十三の高校がある。だがその中でも、西高ほど緑豊かな所は少ないのではなからうか。そこで、西高の四季の移ろいを振り返ってみたい。

春四月は、成願寺公園の桜の開花から始まる。満開のころの日曜になると、弁当や敷物など各自持参で、いそいそと花見に出かけたものである。次いで中旬になると、弓道場西のベニカナメモチの紅い幼葉が見ごろになる。五月にな

放送部の部員も高橋君も、決して平坦な道を歩いたのではない。歯を食いしばり、肩を組み、力を合わせて、ひたむきに求めるものを追い続けた青春だったと思う。

五月から六月にかけて、運動場南端の木立で、ホトトギスが長い渡りから帰った挨拶をし、運動場の西方にある池で、カイツブリがキリキリとあわただしく鳴くのが聞こえる。六月下旬になると、裏門を入って左手にあるハナツクバネウツギの開花が始まる。七

月に入るとヤマモモの実が熟れる。雌雄異種で実のできる雌株は、第一教棟入り口西方と、運動場西端に、ほんの数本ある。実は食用になる。盛夏になると第二教棟放送室の北にあるカクレミノが葉を茂らせる。その葉は、枝先に集まっているので内側に空間ができ、鳥たちの憩いの場となる。ヒヨドリ、スズメなどが授業時、休憩時の関係なく避暑にやってくる。

九月の運動会前になると、校内の清掃は一段と行き届き、雑草にとっては受難の時期となる。だが、運動場の南端にあるクズは人目につきにくく、ひそかにつばみをつけひたすら開花時機の来るのを待っている。秋も深まってくると、正門から裏門への道沿いにあるイチヨウ並木、裏門から図書館北側のケヤキ、運動場周辺のモミジ類が、一斉に色づく。イチヨウも雌雄異種だが、雌株が多いので、その実を拾うには苦勞しない。木は決して大きくはないが、濃黄の葉を身をまとい整然と並ぶ様は見事である。一方裏門のケヤキも葉の色を黄色か

ら茶色へと変え、季節の移ろいを告げてくれる。

冬の到来とともにこれらの葉は枝を離れ、その跡始末に、教職員や生徒のボランテア登場となる。運動場の北にある楠は、この時期葉を茂らせる実をつけている。その実をヒヨドリとムクドリが奪い合うが、勝敗はいつも大柄なヒヨドリの勝ち。年が明けると、進路室北側及び図書館周辺のサザンカが咲き、その花の蜜を目あてにメジロが来るようになる。

西高を訪ねると、年毎に知り人が少なくなるが、ここへ上げた多くの生き物たちは、昔の姿で迎えてくれる。西高はすばらしいところである。

### 同窓会総会案内

日時 8月12日(土)  
6時30分開会  
場所 国際ホテル松山

### 『西高に感謝!!』



日本クラウン株式会社 専属歌手  
株式会社 さち 取締役副社長  
FM愛媛 パートナリティー  
松山大学経済学部財政学研究室 在籍  
十八期生 宇都宮 貞史

「西高!がんばって!いきまあ!シヨイ!!」  
これは私が今でも辛いことがあれば、いつも心の糧にしている言葉です。  
授業開始五分前になると運動場から聞こえてくる集団走のかけ声、また五時間目ともなればお腹いっぱいということもあり、教室の先生の声と集団走のかけ声が心地よいテンポで眠気を誘っていたのが思い出されます。おそらく、多くの卒業生も同じくこの言葉にはそれぞれ深い思い出があるのではないのでしょうか。  
私は小さな頃から歌謡曲が大好きで、将来は歌手になることを夢見ていました。中学生になった頃から各地域の老人ホームなどを慰問するというボランテア活動を中心に、一昨年(一九九八年)の十二月に念願の日本クラウ

るのが「強い志」をもつという事です。何事も志や目標がなければ達成することは出来ません。そして志を実現すべくこつこつと努力するのみだと思えます。西高で培われた粘りと根性の精神を持ち続け社会で一翼を担える人間となるよう努力したいと思えます。  
現在の私を創り上げてくださった諸先生方や先輩、同輩そして西高精神に対し深く感謝するとともに今後の松山西高及び同窓会の一層の発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

立っています。  
私自身、常に心に刻んでいます。  
仕事をしている中で当たり前ですが、たくさんの壁やスランプに落ち込んだり悩んだりすることがあります。  
西高時代に生徒会長やグループ長を経験させて頂き、その経験から或いは諸先生方から学んだ、人との付き合い方など今では本当に仕事の中で役に立っています。

